

心の中のシルクロード

—『なら・シルクロード博'88』をめぐる—

春日直樹*

“The Silk Road in Our Mind”

Naoki KASUGA

序

本稿は「なら・シルクロード博'88」を対象に、シルクロードのイメージについて検討をこころみる。考察は、次の三つのステップをつうじて展開される。その第一は、博覧会がシルクロードのいかなるイメージを前提として要求したかについて。第二は、こうしたイメージが博覧会によって實際上どのように表現されたのかについて。そして第三は、入場参加者側がそれをどう受けとめどう評価したかについて、それぞれ検討するものである。博覧会の表現様式は、博覧会自身による博覧会の記述や宣伝をつうじて吟味される。また入場参加者への効果は、奈良大学の学生20名へのインタビュー結果にもとづいて論じられる。シルクロードのイメージはこうした博覧会における表現様式とその効果を考察する過程で、随時その特徴を浮きぼりにしていくと思われる。結論部では、博覧会側と入場参加者側がシルクロードに対するイメージの齟齬を越えてひとつの共犯関係(collusion)を構成しており、博覧会への批判が参加者自身への批判へと向かっていくことを述べるつもりである。

I. 前提とされたイメージ

博覧会におけるシルクロードのイメージの特徴は、この博覧会がみずからいかなる役割を課したかという問題と不可分に結びついている。まず、博覧会の基本理念についてみてみよう。

日本の文化は、かつてシルクロードを通じてユーラシア大陸全域に、その源を発するものでした。物質的な欲求が相当に満たされた今、私たちはその原点に立ち帰り、日本人の文化的ルーツを検証しながら、広く日本と世界の未来について思慮深く展望しなければならぬ時代に入りました。¹⁾

ここには博覧会による日本文化のオリジン探求と、その探求がもたらす未来についての展望とが、不可分なかたちで提起されている。この両者をつなぐ鍵は、「シルクロードを通じてユーラシア大陸全域にその源を発する」という表現と、また「物質的な欲求が相当

* 社会学部社会学科(平成元年9月30日受理)

に充たされた今」という言葉の中に暗示されている。つまり日本文化は「ユーラシア大陸全域にその源を発する」程の普遍性をひめており、また今日「物質的な欲求を相当に充たす」程の発展を遂げているという認識である。とりわけ後者については、シルクロード博会長の挨拶文の中にきわめて端的にみとることができる。

……わが国は、先進科学技術国へと発展を遂げました。その急成長は世界の人びとの驚嘆的となり、生活は物質的にみだされてきました。いま私たちは徐々に心の時代へと移行しようとしています。²⁾

「世界有数の科学技術国家」となった日本は、今それにみあうだけの「心」を必要としている。そしてその「心」の探求はくしくも「ユーラシア大陸全域にその源を発する」自文化を振り返ることから始まる。日本文化のオリジンを探求するという営為は、こうして世界的スケールでの過去と、また世界有数の科学技術国家にふさわしい未来とを結ぶ中間点として、みごとと位置づけられることにある。まさに博覧会の理念は国際的レベルにおいて語ることができるのであって、このことはシルクロードの「大陸全域」を網羅する壮大なスケールと、そのシルクロードの日本文化への根源的影響とを前提にはじめて可能となったのである。

とはいえ、博覧会の位置づけはさらなる認識にウラ打ちされなければならない。シルクロード博はなぜ奈良で開かれ、またその奈良に対しどのような効果をもたらそうとしているのか。「国際的な文化財都市としての奈良は、この博覧会において……数多くの貴重な文物と民族交流の歴史を展覧し、シルクロードの終着駅としての姿を世界にアピールしたいと存じます³⁾」。奈良は単に「日本文化の原点」とみなされるだけでない。「シルクロードの終着駅」（もしくは「終着点」(terminus)）としてうちだされている。終着点、それは「全ユーラシアの文化が……流れこんだ」土地であり、「沿道諸国の美と文化」が「花開」いた土地である⁴⁾。だからシルクロードの紹介は、まさにこの道の総もととじめともいふべき奈良においてこそおこなわれるのがふさわしいのである。

では、この「終着点」としてのアピールは、奈良の地位を一体どのような意味において高揚させるのだろうか。博覧会の理念には、次のような示唆的文章が登場する。「シルクロードの終着点は、文化振興をはじめ、国際交流や最先端の科学技術の分野で、今、新たに脚光を浴びようとしています⁵⁾」。あらたに脚光を浴びる——この言い方は逆説的に「文化振興」「国際交流」「科学技術」の分野でたち遅れてきた奈良の姿を暗示させている。そんな奈良の地位復権が今シルクロードによってなされるということは、この都市が（たとえば東京のように）極端な西洋志向のスタイルで再出発することを意味しない。奈良はまた、東洋にもアジアにもあるいは仏教圏にもみずからを閉じ込めようとはしないだろう。シルクロードとはそうした局地的視野を拒否するところに存立するのであって、このスキームにおいて特権的地位を与えられたことの意味はことさら大きいといわねばならない。それを端的に物語るのは、奈良が西欧文明の一大中心地ローマと対置可能となったことである。つまり博覧会はシルクロードを、イタリアから日本に至るまでの西洋・東洋を網羅する壮大な領域に位置づけて、東の終着点奈良を西の出発点のローマに対等に配置してみせる。奈良とローマとは、東洋でも西洋でもないシルクロードの共有によって、驚く程たやすく対置可能となる。ここで奈良の地位は、西洋的視野ともまた東洋的視野とも異なるあらたな場所において、つまりは西洋／東洋という相互排他的な二分法そのものを超えた新地平において復権されるのである。

こうして博覧会は、みずからの理念の実現のために、次のようなシルクロードのイメージを前提として呈示する。ユーラシア大陸の西から東までを網羅し、西洋／東洋の対立をのり越えるだけの壮大さと統一性をもった姿。しかも奈良を終着点とし、かつ現代日本にとっての文化的ルーツ性を明示しうる姿。さらには高度産業社会に生きる我々に、「心の時代」を想起させる姿。博覧会の成功・不成功は、こうしたイメージが説得力あふれるかたちで表現されるかどうかにかかっているといえる。以下ではこれらの表現が、博覧会の展示、紹介、宣伝をつうじて具体的にどのように展開されたのかを検討することにしよう。

Ⅱ. 表現されたイメージ

(a) シルクロード文化の実在性

ユーラシア大陸の東西を網羅し、西洋／東洋の対立を乗り越えるだけの壮大さと統一性を表現すること、博覧会はこれをイタリアから日本までの領域設定と、その領域を埋める固有の文化＝「シルクロード文化」の呈示によってなし遂げようとする。つまり東と西の諸民族は、シルクロードに花開いたシルクロード文化によって個々の差異を乗り越え、雄大な統一性を与えられるのである。

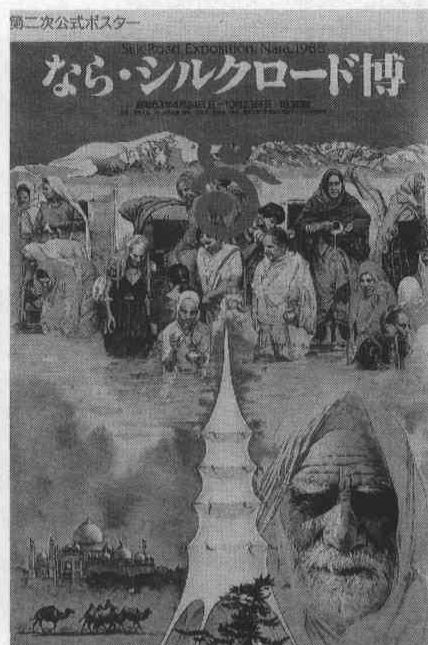
「交流はやがて融合へと発展して、新しいシルクロード文化が誕生した⁶⁾」、「新しい道のりをこえて、シルクロード文化は大和の国に巡りついた⁷⁾」。——ここで「シルクロード文化」は、展示されるべき実体として、はじめから存在する。仏教文化やイスラム文化、あるいは中国文化やインド文化と同様に、一定の特質をそなえ一定の人々によって担われるべきものとして実在する。だから博覧会はあくまでこの文化の存在を主張するのでなく、この文化を紹介するものとしてみずからを規定するのである。

シルクロード文化とは一体何か。言語も信仰も生活慣習も違う諸民族を、ひとつにつなぐ共通性とは一体何なのか。博覧会はこれを、一方では諸文物の伝播の中に、また他方では人類の普遍的心性のかたちを変えた発現の中に、イメージさせるように思える。前者の典型は「シルクロードなら館」であり、衣服や食物、ガラスや文様、大仏などの展示をつうじ「東西の交流」が語られている。同様の方法は、「海のシルクロード館」、「パンのお話パビリオン」、「葦の家」など、特定の食物を対象にシルクロードを考えるパビリオンにおいてもちいられており、大抵の場合、発生地（オリジン）が明らかにされる。後者の方法をとる代表は、「テーマ館」及び「キリンパビリオン」である。「テーマ館」は、西洋のエンジェル、キュービット、ヴィクトリーから東洋のガンダルヴァ、天人、天女までを展示し、また大スクリーンに映し出す。人口はこうして東西にかたちを変え遍在する飛天の中に、「自由に空を飛んでみたい」「人類共通の夢⁸⁾」を実感する。「キリンパビリオン」では空想の一角獣が、西から東まで地図や映画をもちいて紹介される。グリフィンやペガサスやキリンという各々姿をたがえる動物たちは、やはり「平和」や「成長」を願う人びとが「明日への希望を託して創りだした空想動物」なのである⁹⁾。

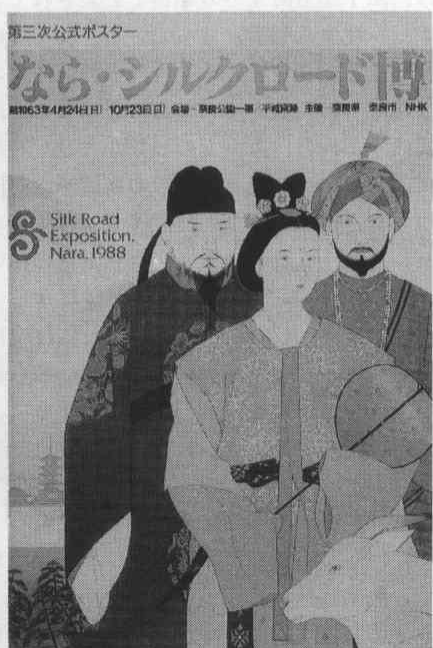
しかしながら伝播を強調する方法も普遍的心性に訴える方法も、はじめからイタリアから日本までの領域に対象を限定していることに変わりない。たとえばイタリアから西に広がる文化との共通性は、アプリアに排除されている。中国・インドあるいは中近東からイタリア以西へと伝播した文化は、なぜたどられないのか¹⁰⁾。文化の共通性の帯は幾重にも交差しつつ無限に四方へと広がっているのに、シルクロードという限定されたしかも広大な領域だけをきっぱりと切りとることは、いかにして可能なのか。この意味で境界の切断



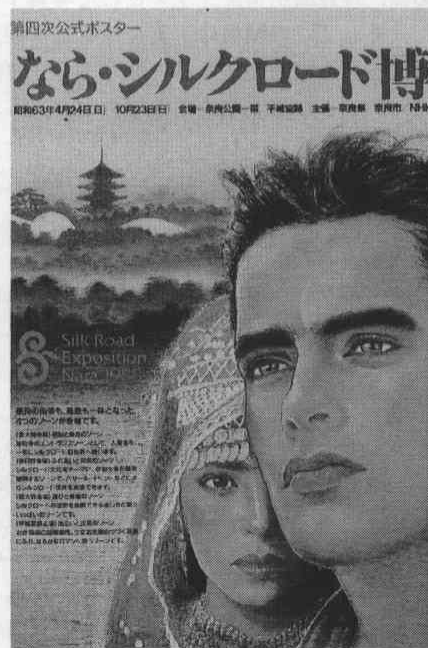
No. 1



No. 2



No. 3



No. 4

は文化の実体による明確な裏付けを欠いたまま、ただ「シルクロード文化」が紹介されるかぎりにおいてのみ実在性を保つにすぎないのである。

シルクロード文化が実在するとすれば、これを担う「シルクロード人」も実在しておかしくはない。実際「ロードサット・オアシス物語館」では、シルクロード人のためのパスポート¹¹⁾が配られ、『われらシルクロード人』が毎日のように上演された。このシルクロード人は、肌の色・骨相・言葉・生活慣習・信仰をたがえながらも、同じ文化と同じ歴史とを共有している仲間である。シルクロード人は互いの差異を乗り越えるべく「やさしい」「人なつこい」「底ぬけに明るい」人間として紹介される。彼らの間の差異がコミュニケーションの阻害因となることはない。阻害因として上げられるのは、もっぱら苛酷な自然であり、シルクロードの交流はこの自然との対峙をつうじてドラスチックに表現されていく。つまり旅人はまず砂漠に代表される厳しい自然的地理的試練と相対し、死を賭してこれを克服せねばならない（たとえば「タクラマ館」、「富士通館」）。だがみごと試練を克服したなら、そこには勇敢な旅人を迎える「家族みたい」に寛容な人々がおり、オアシスでの語らいが待ち構えている。ここで文化の距離の問題は空間のそれに置き換えられている。だからシルクロードの交流は技術進歩のもたらすコミュニケーション拡大と結びつけられても決しておかしくはない。事実「NTT館」の『絹の道から光の道へ』、「京セラ館」の『現代のシルクロード』、「宇宙・夢・旅人館」の『現在から未来へのシルクロード』などは、シルクロードをもっぱらこの種のメタファーとしてもちいている。つまり文化的実在性を付与されたシルクロードなる領域は、この領域自体を超越し、しかも文化性をも昇華させた比喻として機能するのである。

シルクロード文化の実在性を表現するメディアとして、特に注目したいのはポスターである。博覧会用にデザインされた写真1の4枚は、No.1からNo.4への順番で公表されてきた。そしてこの順番は、実在性をより強力にイメージ化する順番となっている。No.1では砂漠に行く隊商の頭上に、敦煌第45窟の菩薩像がそびえ立っている。隊商と菩薩像はエキゾチックな雰囲気をかもしだすが、みる側＝「我々」の視線と交叉することはない。両者は我々のまなざしから切れた完結した世界を構成する一方、奈良とのつながりを（特に菩薩像が）間違いなく暗示させてみせる。これに対しNo.2は、我々に複数の視線をさし向けながら、しかも奈良とのつながりを読みとりづらくさせている。大河ガンジスに沐浴する人々、老人、パミールの山並み、タージマハール宮殿、これらはシルクロード博の白いシンボルタワーをとり囲むことで、どうにかシルクロードにそして奈良へとつながる。ここでは視点の転倒がおこっている。つまり「彼ら」をシルクロードに組み入れたのは「我々」であり、「我々」こそ「彼ら」みづめ分類づける者であるのに、まるで「彼ら」がはじめてからシルクロードに属していて、「我々」の見返すのを待っていたかのように、そうして「我々」を戸惑わせているかのように描かれている。

こうした視点の転倒は、No.3では空間的次元から時間的次元でおこなわれる。ここで「我々」と「彼ら」は同じ空間（平城京）に位置しつつ別な時間を生きている。「彼ら」つまり日本の官女、中国の高官、インドの高官は、何かしら特別な関係で結ばれているかのように、一体となって「我々」を見返している。No.2同様、「彼ら」の関係が「我々」によってつくられたことが、隠蔽されるのである。そして「我々」がみづからの祖先（官女）との距離を少しでも埋めようと彼らに近づくと、両者の間には中立的な視線の動物が介在していることに気づく。この仲介者としての動物とは、博のシンボルのひとつ、つまり鹿であり、「我々」と「彼ら」の時間を越えた出逢いが博覧会によって可能となるこ

とを表現しているのである。視点の転倒は、No.4では空間かつ時間をあわせた次元でおこなわれる。つまりローマの男性とトルコの女性が、西から東を、過去から現在をみつめている。ただ‘我々’との対立強化は、彼らの視線の弱まりによって相殺される。ローマの男性は‘我々’と同様に、シルクロード博会場をみつめているからである。ここでは視線と転倒が時空間においてなし遂げられながら、しかも博覧会そのものが‘我々’／‘彼ら’のともにみつめるべき対象として提示される。

このようにポスターは、‘我々’と‘彼ら’の関係を空間軸そして時間軸において転倒し、最後は博覧会と展示対象（彼ら）の関係自体も転倒させるに至る。‘彼ら’は‘我々’の視線、博覧会の展示によってはじめて「シルクロード人」にされるというよりも、もともと「シルクロード人」として‘我々’の視線を待ち構え、博覧会による紹介を待ち望んできたかのように表現される。つまり‘我々’の視線、博覧会の展示よりも古く、そこに実在していたかのように、提示されるのである。

(b) 終着点としての奈良

シルクロード文化の実在性と並んで重要なのは、この文化における奈良の選ばれし位置づけである。終着点としての奈良は、「シルクロードなら館」において集中的に表現されている。影絵、物品の陳列、さらに人形の展示などをつうじて、唐やペルシャからの色濃い影響が強烈に印象づけられる。とはいえ、これらは本当にシルクロードの終着点としての証しであろうか。

終着点とは一体何を意味しているのか。「全ユーラシアの文化が……流れこんだ」土地、「諸道諸国の美と文化」が「花開いた」土地、¹²⁾ そうだとすれば当然、西の出発点ローマの影も色濃く展示されなければいけない。この点博覧会には、「なら館」は勿論のこと、他のパビリオンにおいてもまったくといってよい程東西の両都市の連結を感じさせるものはない。たとえば文物の伝播は、西のローマから始まるのでなく、シルクロードの中間地帯から発し東西のローマと奈良とに向かっている。普遍的心性のさまざまな発現という紹介法は、出発点や終着点の発想自体を消してしまうおそれがある。博覧会がこのことに対処すべくとった方策とは、事物を西から東へと順に並べて紹介する陳列法である。既に「テーマ館」や「キリン館」について述べたこの方法は、東西の事物を比較展示する際ほとんどどのパビリオンが採用している。ローマから奈良までというイメージは、「シルクロード文化」以上に実体より形態、展示物より展示法によって支えられているのである（ただこの形態は、ゲームという擬似現実世界において、実体の裏付けを獲得する場合がある。「NEC館」や「富士通館」、「こんこん館」のコンピュータゲームがそれで、ここでは参加者はローマから奈良、ローマから西安、ベネチアから北京へ向かう旅人に一体化しつつ、数々の難関を突破しながらゴールを目指すことになる）。

ローマとの対比はかんじんのローマ自体の影の薄さによって、一層読みとりづらくされている。実際ローマもしくはイタリアが直接登場するのは、「オアシス物語館」、「パンのお話パビリオン」、「YOKOGAWA」、「そんごくう館」、それに先に上げたゲームのパビリオンといったごく限られた場合だけである。ローマと奈良に直接的絆が無かったことは、シルクロード博協会も英文パンフレットの中で括弧つきで認めているものの¹³⁾、この展示のあり方は両者の絆をますます弱いものにしてしまうだろう。その上博覧会では、ローマはむしろギリシャなど西洋の領域のとり扱い自体が比重の小さなものになっていて、「海のシルクロード館」をのぞけばいわゆる西洋のシルクロード文化に焦点が当てられることは



写真 2

ほとんどない。これに対し東洋に限定した展示は、「麒麟館」、「シルクロード民族館」、「井上靖『シルクロードの足跡』」など、枚挙にいと間がない程である。これでは東洋／西洋の区分を越えた壮大な文化というイメージは表現不十分なままにとどまるし、奈良を西洋文明の一大中心地ローマに対置させるという果敢なテーマもまた裏付け不十分におわるのである。

(c) ルーツとしてのシルクロード文化

シルクロード文化は「我々」現代日本人にとってどのように異質にみえようとも、「我々」の文化的ルーツとして提示されねばならない。ルーツであることの体感、それは「我々」がシルクロードの未知の世界を「我々」の故郷、既知の世界として認識し直す作業であり、博覧会はこの作業を成功させるべくさまざまな趣向をこらしている。

写真2は、公式ガイドブックのオモテ表紙である。「ぼくの前に未知がある」、この文章はまさにみる者＝「ぼく」の目の前にかざされている。「ぼく」はぼんやりした暗がりには立っているが、左前方に昇る朝日によってどうやらモスクの外壁にいるらしいことを知る。不可思議な世界、しかしよくみればこの世界は、東の明瞭な世界へとつながっているのがわかる。太陽の昇る東のかなたには、鮮明な色の菩薩像が暗示され、さらに東の「ぼく」の世界へとつうじていく。「ぼくの前の未知」、それはとどのつまり「ぼく」自身にたどりつくための未知なのである。未知の既知への転化、また未知をつうじた既知の再発見、このプロセス全体がタイトル「シルクロード」の下にイメージされているのである。

博覧会の入場参加者は、多かれ少なかれこうした「ぼく」になることを期待されている。

シルクロードとは確かに「神秘の異国、幻想の異域」であり、「謎とロマン」に包まれた「ワンダーランド」である¹⁴⁾。だが、「その道のりをたどってみれば、はるか彼方の国々に思いがけないノスタルジーがみえてくる」。「大陸はエキゾチック、ただどこか不慣れな感じがする」¹⁵⁾。それは「刺激的で感動的」な「あたらしい発見」¹⁶⁾である。博覧会是这样した未知の世界シルクロードと「我々」とのつながりを、あるときは文物の伝播、またあるときは共通の心性を喚起することによってイメージさせる。「彼ら」との否定できない差異を表層のものとしてしりぞけるために、ほとんど完璧ともいえる精神的一体化がときに言明される。「私たちにはその歴史に生きた人々の心の中、海をこえた都へのあつい思いが想像できる。それは私たちの心の中にも、シルクロードが脈々と息づいているから」¹⁷⁾。ここではシルクロード文化の共有のみならず、この文化を担うシルクロード人としての意識が喚起されている。

シルクロード人という意識の発揚は、先にふれた「オアシス物語館」において最大のテーマとしてかけられている。シルクロード沿道の街並みや商店が模して並べられる中、入場者は物を売り民族芸能に興じる現地人と交流しあうよう期待される。ただしパビリオンは、「我々」を単純に「彼ら」に同化させようとするのではない。むしろそこにいる人間すべてを互いに異人としてあい対させ、そこから同じ仲間意識をつくり上げようともくろんでいる。「ここはすべてのシルクロード人たちが、あたたかな連帯感を肌で感じあえる集いのオアシス」¹⁸⁾なのである。連帯感がシルクロード文化の共有によって、立ちあらわれることはいうまでもない。「はじめのうちはただ珍しかっただけ。でも現地の品々や食物、民族芸能などにふれるにつれて、『どこかで見たことがある』『何かに似ている』という一種のなつかしさを覚えるのです……。オアシス物語館の中に身をおけば、今日の西歐化社会になれ親しむ私たちも、シルクロード人であることを肌で感じるができます」¹⁹⁾。

(d) シルクロード文化の非時間性と「心の時代」

ところでシルクロードに「我々」現代日本人の文化的ルーツをみとめることは、いかにして可能となるか。博覧会ではシルクロード文化は時間を超越して生きつづけ、長い間「我々」の振り返るのを待っていてくれたかのように表現される。つまり「我々」が西洋に顔を向け西洋を追いかけて、そして世界有数の科学技術国家となった今でも、ひとたびシルクロードに目を向けるなら、そこにはかつてと変わらぬ姿で「我々」をやさしく迎えられる同胞、「彼ら」をみいだすのだ、というように。

このシルクロード文化及びシルクロード人の非時間性は、博覧会をめぐるあるいは博覧会におけるほとんどの表現に等しく貫かれている。たとえば博覧会の紹介には、次の同形異種のふたつの文章が平行してもちいられている。「『シルクロード博』は、シルクロードに生きた諸民族の文化・歴史・技術・くらしなどを総合的に展開する国際的な文化博です……」²⁰⁾／「『シルクロード博』、それはシルクロードに生きる諸民族の文化や歴史を一堂のもとで紹介する展覧会です」²¹⁾。ふたつの文章は、決して別種の展示を指示しているのではない。博全体を紹介する文章であって、そこにはシルクロードをめぐる過去と現在の相互代替性が象徴的に示されている。過去は現在の姿であられ、現在は過去の投影物となる。だから博覧会は、「できる限り現在の人と物をそのままもってくる臨場感」²²⁾を強調しながら、「我々」に「千三百年の昔、わたしたちの祖先が体験したのとできれば同じ感動を」²³⁾期待する。「現地取材した音」で「古代の商人の声」²⁴⁾を喚起し、テヘランの絨毯屋によって「千夜一夜」の世界へいざなう²⁵⁾。あるいは民芸品バザールを「歴史

ショッピング」や「タイムマシン」と結びつけることを、当然とおこなうのである²⁶⁾。

シルクロード文化は、「千幾百年の時をこえてはるかなロマン²⁷⁾」の中に生きつづけている。パズールのにぎわい、砂漠をいく隊商、遊牧民の踊り、モスクでの祈り、何も変わるものはない。そこには時代を超超した永遠のシルクロードの姿が、鮮明にうちだされている。「彼ら」はこの意味で、「我々」が追い求めてきた西洋のイメージとは対極に位置している。西洋文化はつねに「進歩」を志向し、たえず変化に身をさらしながら不可逆的な時間を生きている。これに対しシルクロード文化は、「進歩」など気にもとめぬかのように悠然と時間を超超した世界に自足し生きつづける。シルクロードのこの姿は、停滞や野蠻、暗黒といったネガティブなイメージにはつながらず、むしろ「ロマン」や「神秘」といったポジティブなそれを負荷される。確かに博覧会は、「彼ら」を信仰や芸能、「底ぬけに明るい²⁸⁾」笑顔や語らい、「涼朴でやさしい、そして熱い²⁹⁾」瞳、のうちに表現してみせる。「彼ら」は質素な生活に幸福をみだし、稚拙なコミュニケーション手段をもって偉大な東西交流をなし遂げている。このことは、「我々」の求める「進歩」に対する強烈なアンチ・テーゼとなる。「我々」は自己のルーツを探ることで、みずからの「進歩」の相対化や反省を迫られるであろう。だから博覧会は「心の時代への移行」を謳い、「技術発展とのかかわりを考慮したあらたな文化の定義³⁰⁾」を提唱する。それは概して進歩の拒絶ではなく、むしろ進歩をより価値あるものにするための自省である。この自省をもっとも積極的に促すとされるのは、春日野会場における幾つかのハイテク・パビリオンだと思われる³¹⁾。ここでは最新技術を駆使した未来のコミュニケーションが、シルクロードの心の発展として紹介されるのである(本節(a)を参照のこと)。

しかしながら、こうして進歩と心のあらたな調和を問うという発想は、結局ふたつの文化の断絶によって支えられていることを忘れてはならない。交叉することのない両方の生き方それぞれからよい部分だけを切りとってつなぐ、というつぎ木に似た思考によってである。不可逆的な時間の文化と非時間的な文化、この単純な二分法の是非についてはここでは論じない。ただ博覧会が、ふたつの世界の現実的出会いを決してとり上げなかった、ということ強調しておきたい。シルクロード人はあくまで「別の時間に生きる別の人間たち³²⁾」であり、「我々」の同時代人ではない。そしてこの出会いの回避によって、博覧会は両文化の対立要素の考察を欠落させながら、よいところだけの折衷を容易に提起することができたのである。つまり「我々」に「心の時代」を喚起させる、ということが。

Ⅲ. 評価されたイメージ

このように博覧会はシルクロードの壮大さと統一性とを、ローマから奈良に至る共通の文化の呈示によって実体化し、奈良の終着点としての姿をアピールする。またこのシルクロード文化を現代日本の「我々」のルーツとして、さらに「心の時代」を自省する契機として表現する。こうした演出は実際の入場参加者に対し、どのような効果を及ぼしたのだろうか。以下では奈良大学の学生20名へのインタビュー結果を検討しながら、博覧会の効果について考察し、そこからシルクロードのイメージ自体のはらむ問題点について明らかにしようとする³³⁾。

(a) シルクロード文化の実在性

インタビュー結果をみるかぎり、シルクロード文化はほぼすべての学生にその実在性を認められている、と思われる。まず彼らのほとんどはシルクロード文化のイメージを、迷

表1. シルクロード文化のイメージ

(一人3単語まで。括弧内は解答数)

絹	(2)	商人	(2)
砂漠	(5)	貿易	(2)
ラクダ	(7)	隊商	(1)
砂	(2)	商品流通	(1)
オアシス	(1)	市場	(1)
太陽	(1)	文化交流	(3)
水	(1)	異文化	(2)
熱	(1)	文化のモザイク	(1)
古代	(1)	民族	(1)
		文化・宗教	(1)
不思議	(1)	正倉院御物	(1)
謎	(1)		
夢	(1)	壮大	(1)
神秘	(2)	長い道のり	(1)
ロマン	(1)		
マルコ・ポーロ	(1)	地味・寂しい	(1)

表2. シルクロードのイメージ

(一人1単語ずつ。括弧内は解答数)

神秘的	(2)	アラビアン・ナイト	(1)
不思議	(1)	中近東	(1)
エキゾチック	(1)		
謎	(1)	仏教文化	(1)
夢	(1)		
民族の交流	(2)	土・岩・大地	(1)
東と西の交流	(1)	壮大さ	(1)
各地のよいものの集大成	(1)	ロバ・ラクダ引く商人	(1)
古代	(1)	地道さ	(1)
タイム・スリップ	(1)		
停滞	(1)		

表3. シルクロード諸民族が一体の文化で結ばれている
と感じさせたバビリオン

オアシス物語館	7
テーマ館	5
海のシルクロード館	2
キリンバビリオン	1
シルクロード民族館	1
なし	3
逆に違いを感じた	1

表4. 「シルクロードは広大な国際交流の回廊である」

そう思う	20	
博覧会に行って思うようになった		4
博覧会に行って一層思うようになった		7
博覧会に行ったことは無関係		9
そう思わない	0	

表5. シルクロードについてあらたに認識したこと

シルクロード文化の予想以上の広がり	8
文化の多様性	1
文化の体系性	1
つらさ・遠さ	1
良い伝統の遍在	1
キリン伝説の存在	1
西アジアの生活の実用性	1
とくになし	4

(オープン・アンサーを項目化して集計)

表6. 博覧会への要望

会場の集中	6
◎ シルクロードらしさの呈示	4
商業主義の抑制	2
時間延長	1
内容の高度化	1
周到な準備	1
案内板の充実	1
雨対策	1
その他	2
とくになし	1

(オープン・アンサーを項目化した集計値)

表7. 博覧会の意義

◎ シルクロードをある程度紹介した	7
人類の歴史をおしえた	3
シルクロードへの興味をかきたてた	1
シルクロードを少しは身近にした	1
文物の展示をおこなった	1
奈良文化への理解を深めた	1
奈良に観光客を集めた	1
その他	4
なし	1

(オープン・アンサーを項目化して集計)

わず幾つかの単語で表現する(表1)。シルクロード文化が西洋／東洋にまたがる壮大なものである点も、広くうけいれられている。たとえば“シルクロードの諸民族が一体の文化で結ばれている、と感じさせたパビリオンは?”の解答は、ほぼ「オアシス物語館」、「テーマ館」(特に飛天)、「海のシルクロード館」に集中しているが、これらはみなローマやギリシャの文物まで広く紹介する数少ないパビリオンである。(表3参照)。この東西交流のテーマに関する博覧会の効果を示すのは、表4であろう。「シルクロードは壮大な国際交流の回廊である」というコピーは、全員の学生に受けいれられており、またそのうち11名はあらたな認識として、あるいはより強い認識として受けとめている。これと関連するのは、表5“シルクロードについてあらたしく知ったこと”で、シルクロード文化の予想以上の広がり8名によって指摘された。シルクロード文化の実在性は、表6“博への要望”及び表7“博の意義”に関する解答の中にも暗示されている(解答◎印)。

文化の実在性については、ただ2名のみが比較的批判的な受け答えを返しているだけである。彼らは“シルクロード文化のイメージ”について、多種多様で広すぎるため表現ができないと答え、また“諸民族が一体の文化で結ばれていると感じさせたパビリオン”については、きっぱり「なし」と答えている。この後者の質問には、他にひとりが「なし、むしろ違いを感じた」という答え方をしている。とはいえこれらの解答も、文化の実在性を正面から反駁するものでは勿論ない。

シルクロード文化の担い手、シルクロード人の実在性もまた、抵抗なく受けいれられている。つまり学生は、シルクロード人のイメージ化をためらうことなくおこなう。例外は先に上げたふたりで、彼らは「シルクロード人」を「シルクロードの人々」と置き換えることによってのみ、イメージ化と比較を受け入れたのであるが、それでもイメージについてはしばしば民族と文化の違いを上げて画一化に対する抵抗を示した。イメージは表8に示すように、“素朴”“伝統的”“信仰深い”のそれぞれがほとんど全員に共有されている。これらは博覧会の表現と重なるが、一方で“ひとなつこい”“親切”といったイメージが約半数にしか認められていないのは注目値する。表9“シルクロード交流に立ちただか一番の障害とは何か”で、文化や言語・政治体制の差違が5つあらわれているのも、博覧会との多少のくい違いを示すものである。しかしながらシルクロード人というイメージは、3項目もの共通基盤をもってほぼ全員に受けいれられたことになる。

(b) 終着点としての奈良

シルクロードの終着点奈良の姿は、2節で論じたように博覧会では充分に表現されていない。このことはインタヴュー結果にも率直にあらわれたと思われる。「奈良はシルクロードの終着点である」というコピーは、15人に肯定的に受けとめられたが、このうち博覧会の効果はわずか2例について認められるにすぎない(表10参照)。残りの13例は学校をはじめ他の場所で既にこの知論を獲得しており、博覧会によって認識を特に強められることもなかった。コピーを拒否した5例のうち4例は「シルクロードは中国まで」と答えており、残り1例は「奈良でなく日本全体」としている。

ところで奈良は、いかなる意味においてシルクロードの終着点なのか。奈良にたどりつき今日まで残ったシルクロード文化として学生が上げたものは、まったくといってよい程東洋のそれに限られている。表11にみられるように、物質文化・精神文化を問わず西域や中近東起源のものばかりが上げられ、西洋の影響は完全に欠落している。これでは、奈良がシルクロード全体の総もとじめになっているという姿はあらわれてこない。奈良をシル

表8. シルクロード人のイメージ

	思　　う	思わない	文化によりけり	わからない
伝統的	19	1	0	0
素　朴	18	1	1	0
信仰深い	18	1	1	1
神秘的	16	3	0	1
我慢強い	14	1	1	4
のんびり屋	13	5	0	2
親　切	11	3	0	6
ひとなつこい	11	5	1	3
保守的	10	5	0	5
礼儀正しい	7	3	0	10
用心深い	7	8	0	5
戦争好き	3	14	0	3
残酷	2	18	0	0
ホラ吹き	1	14	1	4
暴力的	1	19	0	0
軽　薄	0	18	0	2

表9. シルクロードの交流にたちはだかる最大の障害

砂　漠	5
自　然	3
海	3
距　離	2
文化の差異	2
言　語	2
政　治	1
あこがれの弱さ	1
山賊・盗賊	1

(オープン・アンサーを項目化し集計)

表10. 「奈良はシルクロードの終着点である」

そう思う	15
博覧会に行ってそう思うようになった	1
博覧会に行つて一層思うようになった	1
博覧会に行ったことは無関係	13
そう思わない	5

表 11. シルクロードの交流が現在まで日本に残している文化

(数の制限なし、括弧内は解答数)

(a) 物質文化	寺院	(3)	(b) 精神文化	仏教	(9)
	建築	(1)		言語・文字	(3)
	仏像	(1)		礼儀	(2)
	瓦	(1)		信仰心	(1)
				呪術	(1)
	香(辛)料	(2)		辛抱強さ	(1)
	米	(2)		探険好き	(1)
	チーズ	(1)			
	バター	(1)		残っていない	(2)
	紙	(3)		わからない	(2)
	絹	(2)			
	衣服	(1)			
	陶器	(1)			
	敷物	(1)			
	馬	(1)			
	道	(1)			
	わからない	(5)			

クロードの出発点ローマと結びつけたあのスキームも、言葉としては受けいられるものの、現実感覚として体得されることは困難になる。たとえば、“世界中で行ってみたい都市のベスト3は？”にローマを上げた学生は3名いたが、そのいずれもこの都市をシルクロードにおいてとらえたものではなかった。ローマはスペインのマドリーと並ぶ南欧の都として、またエルサレムと並ぶキリスト教の中心地として、そしてアメリカと並ぶ西部劇映画を生んだ国の首都として、その名を上げられたにすぎない。

ローマと奈良、この両都市の連結の不成功は、決して博覧会の演出不足にばかり帰せられるものではないだろう。確かに文化の実体は、ふたつの都市を簡単に結びつけようとはしない。ただこのことは、さらに大きな問題へつながっていく。シルクロード文化という文化の実体をめぐる問題へ、である。シルクロード文化のローマから奈良に至る実在性は、ほとんどの学生によって認められている。だがはたして彼らは、この広範囲に及ぶ文化を本当にひとつのものとして受けとめることができたのだろうか。もしできなかったとすれば、ふたつの間の矛盾は一体どのようにして処理されていくのだろうか。

(c) ルーツとしてのシルクロード文化

シルクロード文化に‘我々’現代日本人の文化的ルーツをみとるということは、たとえば博覧会による次の3つのコピーの受容へとつながる。「シルクロードは日本人の文化と心の源流である³⁴⁾」、「シルクロードはエキゾチックだがなつかしい³⁵⁾」、「私たちの心にはシルクロードが脈々と息づいている³⁶⁾」。そして博覧会はこのコピーの受容に、少な

表 12

タイプ		インタビュー 番号	シルクロード人 との一体感	シルクロード人／欧米文 化の親近感比較	シルクロード人／欧米人 の親近感比較	「シルクロードは日本人 の心と文化の源流」	「シルクロードはエキゾ チックだがなつかしい」	「私たちの心にはシルク ロードが脈々と息づく」
シルクロード型		①	有	シルクロード		○	×	×
三極型	シルク ロード 寄り	②	無	シルクロード		○	×	×
		③				○	×	×
		④				○	○	×
		⑤				●	○	○
		⑥				○	●	○
		⑦				×	○	×
		⑧				×	○	×
		⑨				○	○	×
	中 間	⑩		シルクロード	欧 米	●	×	×
		⑪		シルクロード	欧 米	●	×	×
		⑫		欧 米	シルクロード	●	×	×
	欧 米 寄 り	⑬		欧 米		○	×	×
		⑭				○	×	×
		⑮				●	×	×
		⑯				●	×	×
		⑰				●	×	●
		⑱				○	●	×
		欧 米 型				⑲	欧 米	
⑳	欧 米			×	×	×		
独 立 型		㉑	ともに異質	シルクロード	×	×	×	

注:●は中国(及び朝鮮)に範囲を限定

からめ効果を発揮している。つまり20名中7名にコピーの正しさをあたらしく認識させ、他2名に対しては認識の強化をもたらしている。しかしながら、コピーは3つすべてが受け入れられたわけではない。2つに限っての受容は5名、ひとつのみが10名で、ひとつも受容できないのは3名もあり、逆にすべて受容した者は2名にすぎない(表12. 参照)。いうならば博覧会の演出は参加者に一定度の効果をもたらしたはしたが、それも明らかな限界にぶつかっている。しかもコピーの受け入れには半分近くの場合、注目すべき同一の留保がつけられている。中国(及び朝鮮)に範囲を限定するという留保である(同表 参照)。ここでシルクロード文化は、日本文化に照らしたとき不均質なものとして認識されている。シルクロード文化一般にルーツ性や郷愁や心の中での息づきを感じるということには、一層の限界がかせられていることになる。

こうしたシルクロードに対する距離のとり方は、シルクロード文化及びシルクロード人への一体感を問題とすると、よりはっきりとあらわれる。まず“シルクロード人への一体感を覚えたか”の質問には、ただひとりのみがいyesと答えたにすぎない。インタヴューはこのひとりだけをのぞけばすべて、シルクロード文化に日本文化を含めることを拒否している。日本文化はシルクロード文化の影響を色濃くうけ、その影響を今も強くひきずっているが、概してシルクロード文化ではない。だから自分たちもシルクロード人ではない。これが彼らの基本的な認識なのである。

ここで、彼らがシルクロード文化をローマから奈良に至る広大な文化として認識していることは、強調しておいてよい。もし同じ質問がシルクロード文化でなく東アジア文化として、あるいは仏教文化として、さらには東洋の文化として発せられていたなら、解答は異なっていたに違いない。東アジアに仏教に東洋に、‘我々’を同化させることははるかにやさしい。それは少なくとも、シルクロードよりは鮮明な文化的実体として把握できる。だが、シルクロードは東アジアと地中海を同類として結びつけ、仏教圏をイスラム圏やキリスト教圏に接合させ、さらには東洋を西洋と一体化する。この文化はあまりに神秘的でエキゾチックであり、‘我々’はその多大な影響力までは認めても、それを自己自身に同一化させることはほとんどできないのである。

シルクロード文化というイメージの担う革新性と問題性とは、ここにあらためて浮かび上がる。革新性とは西洋／東洋という単純な二分法からの脱皮であり、問題性とは再三示唆したとおり文化的実体の希薄さである。学生はこの東洋でも西洋でもない第三の文化に一定のイメージを付与してみせており、この点では革新的スキームの一程度の効果が、確かに認められる。だが問題は、西洋に対する関係性を集中的に問われたときに、否定すべからざるかたちであられる。このことを表12を中心に考えてみよう。

この図は、学生を4つの類型に分類したものである。分類の指標には、まず「シルクロード文化／シルクロード人との一体感」がつかわれており、一体を感じる『シルクロード型』とそうでない『非シルクロード型』が抽出される(先述のように『シルクロード型』はひとりのみ)。インタヴューの大部分『非シルクロード型』は、『三極型』『欧米型』『独立型』に分類される。『三極型』は‘我々’をシルクロードと欧米の中間に位置づける立場であって、‘シルクロード寄り’・‘中間’・‘欧米寄り’の三タイプにさらに分けることができる。‘我々’とシルクロードとのつながりを認めない3名は、欧米人・欧米文化に親近感を招く『欧米型』、またシルクロードも欧米も異質なものとみなす『独立型』に分類できる(この場合、シルクロード文化の実在性に比較的批判的だったのは学生⑩⑪である)。ただし本論がここで問題とするのは、こうした分類そのものではない。分類化を導

く欧米人との比較プロセスが、いかにシルクロードをアジアへまた東洋へと同一視させていったか、という点なのである。

“シルクロード人と欧米人を較べると、どちらがよりわりあえると思うか” “シルクロード文化と欧米文化のどちらに、一層の親近感を覚えるか”，この質問はさまざまな言説を生んでいく。まず『シルクロード型』はともにシルクロードの方であると答え、「やはり西洋より東洋の方が」（①）と説明している。『三極型』では、ふたつともシルクロードを選択した‘シルクロード寄り’また、ひとつのみ選択の‘中間’が、その選択の理由として「同じアジア」（⑤⑥）「アジアに近い」（⑬）、「顔つきが似ている」（⑨⑩）、「同じ人種」（④）、「人種的に近い」（②）、「髪や瞳の黒さ」（⑫）、「白人よりはまし」（⑪）、「仏教や肌の色が近い」（⑦）、を上げている。シルクロード文化やシルクロード人は欧米と較べられるとき、アジア、日本人と同種の人種・顔つき、有色性、と結びつけて把握されることになる。同じことは、上のふたつの質問ともに欧米の方を選択した‘欧米寄り’についても認められる。たとえば、「同じ民族という感じはするが、西欧文化の方が自分には親しみがある」（⑭）、「本当はいつまでも欧米ばかり向いていられない。これからはアジアの国々が伸びるだろう」（⑮）、といった具合である。シルクロードも欧米も日本にとってはともに異質であるとする『独立型』でさえ、第一の質問に対し「肌の色でシルクロードの方がまあ上だろう」（⑳）と答えている。

こうした受けこたえにあらわれるように、シルクロードは一方ではイタリア・ギリシャなど西洋文明の一大オリジンを網羅するものとして認知されながら、ひとたび西洋に対置されるときには、アジア／同種の顔／黒い髪や瞳／有色人種といったいわゆる東洋のイメージへと収斂されていく。それは、東洋／西洋の二分法を乗り越えべく果敢に提起されたシルクロード文化が、結局は実体の希薄さゆえに、西洋に対する東洋といったオーソドックスな図式へと回帰せざるをえないことを物語っているのである。

（d）シルクロード文化の非時間性と「心の時代」

ここでシルクロード及びシルクロード文化のイメージについて、もう一度表1・表2を振り返ってみよう。そこでは「砂漠」、「ラクダ」、「神秘」といった非時間的な項目が大部分を占めているが、「古代」「マルコ・ポーロ」「正倉院御物」「アラビアン・ナイト」など過去をあらわす項目も幾つか上げられている。この過去を強調したインタヴューは、決してシルクロード文化を消滅したものと考えてはいない。ただ現存する文化を過去のイメージで表現しただけであって、この意味で「タイム・スリップ」「停滞」などの項目とつながるものである。こうして彼らのイメージは、博覧会側の表現とほとんど重なる。つまりシルクロード及びシルクロード文化は、過去と現在の代替が可能な非時間的世界として把握されている。ただし彼らは、このイメージを博覧会の以前から持っていたと答えているので、博覧会はこれを彼らの期待どおりに呈示したことになる。

ともあれこうした非時間的なイメージで把握されたシルクロード文化は、20名中16名に‘我々’現代日本人の生活を相対化し反省化する契機として働くよう期待される。“シルクロード文化は、今後日本に大きな影響を与えて欲しいか”（表13.）という問いに、『シルクロード型』と『三極型』〔1名（学生⑥）をのぞく〕は残らずイエスと答え、「素朴さ」「自然と調和した生活」「質素だが本当に豊かな生活」など「失われた過去の良さ」の復権を望んでみせる。彼らはこの点でもまた、博覧会側の主意をそのまま受けいれている。

しかしながら、問題は『欧米型』/『独立型』のノーという解答、そしてシルクロードを「過去の遺物」(19)とみなし、「必要な交流は終わった」(18・20)とする理由づけの中にあらわれる。それは時間を超越した過去そのままの世界が、一体‘我々’の時代や未来に接点をもちうるのか、という問いかけである。この点『シルクロード型』や『三極型』は、次の質問をめぐる立場の曖昧さを露呈する。“シルクロードと日本の交流の歴史は、今後の交流により方向で作用するか”(17名中)3名は「作用するかどうかわからない」と答え、9名は「作用する」としながらも“どのような点においてか”と問われるときは返答できなかった。さらに残りの4名は、「作用して欲しい」としつつ「作用すると思えない」という懐疑的、否定的な答え方をした。その理由は、「向うからとりいれるものはない」(2)、「昔の生活がつづき、こちらから入っていく余地がない」(3)、「シルクロード文化は過去のもので、日本の今後とつながらない」(13)、「得るものがない」(16)、といった具合である。結局両タイプは、シルクロード文化に対し‘我々’の生活を反省化する役割を期待する一方、この文化が今日の‘我々’と具体的にどうつながるかについて、解答をみいだせずにいることになる。こうした立場の苦しさは、とりわけ『三極型』において表13のような期待・予想の不一致というかたちであらわれている。「別の時間を生きる」シルクロードと‘我々’とを実際につなげることは確かに困難であるが、『三極型』はとりわけ接合を望むがゆえに不幸なのである。

博覧会がシルクロードの「心」と‘我々’の現代科学技術との調和を提起してみせたことは間違いない。しかしこの提起は決して、ふたつを同時代において具体的に並べ接合する、というかたちをとったのではない。ハイテク・パビリオンは、シルクロードを単にヒューマン・コミュニケーションのメタファーとしてもちただけであり、シルクロードに展開された生活への連結を展望することはなかった。ハイテクをシルクロードの「心」の発展としていかに謳ったにしても、それは所詮かけ声だけにとどまってしまうのではないか。実際、入場参加者の大部分にとってハイテク・パビリオンは、「何がしたいのかわからない」(13・18)、「シルクロードと無関係」(1・3・5・7・8・10・16・19)、「企業PRにすぎない」(11・15・17)、などの不評をかっている。

同じ問題は、シルクロードの終着点、奈良の将来性をめぐってもあらわれる。なるほど博覧会は、奈良とシルクロードの過去のつながりについては表現できたかもしれない。しかしこの過去の交流は、奈良の現在そして将来に積極的に生かされていくのだろうか。学生の解答は表14が示すように、「わからない」、「よい方向に作用すると思えない」が圧倒的であって、「過去を扱った点が保守的な奈良らしい」(13)というように、博覧会を未来へとつなげる展望は決して開かれていないのである。

シルクロードを非時間的な世界に閉じ込め‘我々’の変動する社会に対比させることは、それ自体決して悪いとばかりいえない。確かにこの方法は、‘我々’自身を相対化し再考させるひとつに違いない。けれども‘我々’はこれによって何を、かわりに何を遠ざけるのであろうか。得るものは漠たる反省、現実化困難な希望であり、遠ざけるものは‘彼ら’との接点、そして過去の交流を未来へとつなげる展望である。この立場からは、‘我々’と‘彼ら’がともに同時代を生きているという現実、直接間接に連結しあう諸システムの中で‘我々’がそしてそれ以上に‘彼ら’が変わっていくという現実、がまったく隠蔽されてしまう。博覧会はこの‘彼ら’の生きた姿、そして‘我々’のかかわりを決して呈示しようとはしなかった。たとえば、トルファンのブドウ棚の下で民族衣裳をつけて踊る‘彼ら’を立体画像に感動的に表現することはあっても、その踊りをみつめる‘我々’

表 13

	シルクロード型	三 極 型	欧米型・独立型
シルクロード文化は今後日本に大きな影響を与えてほしいか	○	○ (例外1名)	×
シルクロード文化は今後日本に大きな影響を与えるか	○	×	×

表 14. シルクロードと奈良の交流の歴史は
今後の奈良の発展により方向で作用するか

作用する	4
作用は困難	1
作用しない	7
悪い方向に作用する	1
わからない	7
(オープン・アンサーを項目化して集計)	

表 15. 博覧会は期待とくらべてどうだったか

期待はずれ	7
期待しなかったので予想どおり	7
期待しなかったわりによかった	4
期待しなかったがさらに悪かった	2
(オープン・アンサーを項目化して集計)	

の泊まるホテルを映しだすことはなかった（ましてそのブドウ棚や踊りが、いかに‘我々’向けにつくられたものであるかを語ることも）。シルクロードのイメージ、またそれと戯れる‘我々’の姿そのものを対象化させることのないまま、ひたすらそのイメージだけを表現し、‘我々’を満足させようといつとめたのである。

未来への展望、「心の時代」への展望——それは誰にとっても具体的に語るには困難なテーマに違いない。けれども展望は、みつめる‘我々’とみつめられる‘彼ら’を同時代人として同じ次元に対峙させることによって、はじめて現実的な課題となりうる。そのとき‘我々’はシルクロード文化とシルクロード人とが‘我々’の分類づけた文化であり人間であること、高度産業社会に生きる‘我々’のアンチテーゼであり陰画の一枚であること、しかもその‘我々’が技術力と経済力をもって開発に観光に乗りだすとき、現実裏切られつつ現実を再構築するイメージとして働くこと、を知るのである。

結 論

以上が「なら・シルクロード博'89」における、シルクロードのイメージをめぐる分析である。博覧会の主催者側と入場参加者側（ここでは20名の学生）との間には、シルクロードのイメージをめぐりさまざまな齟齬がみいだされる。しかしながら両者は、そうした違いを乗り越え決定的な認識を共有している。それは、ローマと奈良、西洋と東洋を結んで壮大なシルクロード文化が実在するという認識であり、またこの文化が千幾百年の時間をこえて今日まで昔の姿で生きつづけているという認識である。この認識の共有によって、博覧会は批判や消極的評価のただ中においても、「シルクロード文化の紹介役」という基本的役割を確として保障されることになる。主催者側と入場者側とは、こうして博覧会の存在理由を堅持し博覧会を成立させるという共犯関係（collusion）を、暗黙裡に構成しているのである。とはいえ共犯関係は、みずからの内部、シルクロードをめぐる基本認識の中に、その限界をはらんでいる。博覧会の評価を不可避免におとしめる、というかたちの限界をである。

まず、シルクロード文化の実在性の問題に目を向けてみよう。シルクロード文化はその具体的実体の希薄さゆえに、博覧会の提起した幾つかのコンセプトを十分に機能させることなくおわってしまうのがわかる。たとえば、産業化の遅れた奈良を西洋文化の一大オリジン＝ローマと大胆に並置させるスチームは、両都市の文化的つながりの弱さゆえに展示法以外の表現をみいだすことができず、入場者への効果もほとんど認められないままにとどまっている。シルクロード文化に現代日本の文化的ルーツをみとらせるというねらいも、限定された効果しか発揮していない。東アジアと地中海、仏教とイスラム教・キリスト教、また東洋と西洋の一部、を網羅するシルクロード文化は、日本文化にとってはあまりにエキゾチックで神秘的であって、シルクロード文化への統合感やシルクロード人への一体感は、ほとんど達せられないままに終わっている。シルクロード文化の実体の希薄さは、さらにこの文化を欧米文化と対置するときに歴然とあらわれる。シルクロード文化のイメージは対欧米のコンテキストにおいて、今度は東洋のそれへと回帰するからである。こうしてシルクロード文化が担っていた東洋／西洋の相互排他的二分法を乗り越えるという志向性は、この文化の曖昧さ、また二分法の根強い存在によって、むなしく握りつぶされる。

あるときは東洋と西洋を網羅し、あるときは西洋に対する東洋としてたちあらわれるシルクロード文化、この曖昧模湖としたイメージはまた、いついかなるときにも非時間性という確たる属性を刻印されつづける。この意味では、シルクロードは西洋ともまた東洋と

も違う第三の世界である。あくまで‘我々’とは「別の時間に」存在しながら、具体的な接点や理想的な共生を問題にすることもないまま、ただ漠然と「心の時代」だけを喚起してみせるそうした世界である。それゆえ博覧会の入場者の多くは、シルクロード文化に‘我々’の失なった良きものをとり戻すという役割を期待するその一方、この役割実現の可能性に対しては懐疑的あるいは否定的にならざるをえない。博覧会が唱える、シルクロード文化の‘我々’時代への意義は、ここでも絶対的な限界にぶつかることになる。

こうして博覧会がシルクロードに託したさまざまな希望は、ほとんどが実現半ばにして挫折している。それは博覧会の意義づけの挫折であり、博覧会の消極的評価へとつながっていく。表7・表15にみられるように、博覧会の意義は「シルクロードの文化をある程度紹介した」という域をほとんど脱しておらず、また大半のインタヴューにとって博覧会は「期待はずれ」に終わっている。「なら・シルクロード博'88」は決して満足のいくものでなかった、これが今日博覧会に足を運んだ者ほとんどの、偽らざる心境であろう。

けれどもこの批判、博覧会をめぐる不満は、はたして本当に博覧会自体に向けられるべきものだろうか。不満は、博覧会の表現力の欠如によってもたらされたものではない。それは、入場者が「もっと表現せよ」と要求する、シルクロードのイメージ自身によって生じたのである。つまりは、ローマから奈良に実在する壮大な文化の、また時間を超越して実在する壮大な文化の、イメージ自身によって、そうしたイメージを前提とするかぎり、博覧会のコンセプトは十分に具象化されえないし、入場者が博覧会に陶醉することははじめから不可能になる。この意味で「なら・シルクロード博'88」に寄せられた批判は、私たち自身のシルクロードへの批判なのである。西洋にも東洋にもない、私たちの心の中のシルクロードへの。

本研究は、昭和63年度奈良大学社会学部共同プロジェクトの一環としておこなわれた。調査に御協力頂いた方々、とりわけ教養学部笠置侃一教授、文学部吉越昭久助教授、なら・シルクロード博協会事務局長（当時）南浦純一郎氏に対し、ここに紙面を借りて心より御礼申し上げる次第である。また草稿の段階で、文献を含めての貴重なコメントを賜った大阪大学人間科学部の梶原景昭助教授には、心より感謝の言葉を申し述べたい。公式ガイドブックから写真1・2の転写を御快諾下さった奈良県企画文化課長の若竹清氏に対しても、あつい感謝の意を表する次第である。

注

- (1) 『シルクロード —シルクロード'88公式ガイドブック』財団法人シルクロード協会, p.10.
- (2) 『なら・シルクロード博』同協会, p.6. 同種の挨拶文として、公式ガイドブック(p.8)も参照のこと。
- (3) op. cit.
- (4) *Silk Road Exposition, Nara, 1988*, Association for Silk Road Exposition, p.6, 及び『なら・シルクロード博 — 謎と浪漫につつまれてこの春、平城の都で開幕 —』同協会。
- (5) *ibid.*, p.10.
- (6) 『なら・シルクロード博』 p.4.
- (7) 『なら・シルクロード博 — 夢の郷、心が都 —』同協会, p.7.

- (8) 公式ガイドブック p. 28. テーマ館パンフレット及びパビリオンの展示板を参照のこと。
- (9) パビリオンパンフレット及びフィルムナレーション。
- (10) たとえば Baltrusaitis, J., 1981. 参照。
- (11) 「このパスポートを所持する者は、シルクロード人として国際平和への願いを訴え、シルクロードを源とする、文化・物・心を共有財産として守る権利を有することを認め、かつ同人に必要な協力が与えられるよう、関係の諸官に要請する。
絲綢之路国 オアシス大臣」。
- (12) ibid.
- (13) ibid., p. 3.
- (14) 『なら・シルクロード博——謎と浪漫につつまれて——』表紙、及び『なら・シルクロード博ニュース』（以下、『ニュース』と略記）1987年11月号, p. 5.
- (15) op. cit., p. 1.
- (16) op. cit., p. 4, p. 5.
- (17) 『なら・シルクロード博——夢の郷。心が都——』, p. 7.
- (18) 公式ガイドブック, p. 56.
- (19) op. cit., p. 57.
- (20) 『なら・シルクロード博』, p. 8.
- (21) 『なら・シルクロード博——謎と浪漫につつまれて——』
- (22) 『なら・シルクロード博ニュース』1987年11月号, p. 5.
- (23) 『なら・シルクロード博——謎と浪漫につつまれて——』
- (24) 「日本たばこ・心のオアシス館」パンフレット。
- (25) 公式ガイドブック, p. 53.
- (26) 『なら・シルクロード博——夢の郷。心が都——』, p. 5.
- (27) 『なら・シルクロード博——謎と浪漫につつまれて——』
- (28) 公式ガイドブック, p. 29.
- (29) 『ニュース』, p. 3.
- (30) *Silk Road Exposition, Nara, 1988.* p. 7.
- (31) 『ニュース』, p. 3 参照。
- (32) Fabian, J. 1983. p. 143.
- (33) インタビュー 20 名は、文学部学生の中から希望者をつのって集めた。
- (34) 『ニュース』, p. 1.
- (35) 『なら・シルクロード博ニュース』1987年11月号, p. 1.
- (36) 『なら・シルクロード博——夢の郷。心が都——』, p. 7.

参 考 文 献

- Affergan, F. *Exotisme et altérité*, Paris, PUF, 1987.
- Baltrusaitis, J. *Le moyen age fantastique*, Paris, Flammarion, 1981.
- 西野嘉章訳『幻想の中世』リプロポート, 1985。
- Clifford, J. *The Predicament of Culture*, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1988.
- Eco, Umberto *Travels in Hyperreality*, London, Pan Books, 1986.
- Fabian, J. *Time and the Other*, New York, Columbia Univ. Press, 1983.
- Gordon, D.C. *Images of the West*, Rowman and Littlefield, 1989.

- Mitchell, T. *The World as Exhibition, Comparative Study of Society and History*, pp. 217-236, 1989.
- Mudimbe, V.Y *The Invention of Africa*, Indiana Univ. Press, 1988.
- Said, E.W. *Orientalism*, New York, Georges Borchardt Inc., 1978.
板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986。
- Todorov, T. *La Conquête de l'amérique*, Paris, Seuil, 1982.
及川馥・大谷尚文・菊地良夫訳『他者の記号学』法政大学出版局、1986。

Summary

This paper is an attempt to investigate the images of Silk Road by examining an event, Silk Road Exposition which was held in Nara in 1988.

To analyze the data we proceeded in the following: First, we tried to find out the presupposed ideas concerning how the Silk Road Exposition was expected to be. Second, the way these ideas were expressed was considered. Last, we dealt with how these ideas were evaluated by the visitors of the Exposition. The following analysis suggests the presence of a problematic collusion between the organizers and the visitors of the Exposition concerning the images they hold about Silk Road.

Although the visitors tended to display a critical attitude towards the organizers, these criticism should be, in fact, interpreted as directed towards the visitors themselves.